

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年
9月号

通巻613号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1-12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



D

▶2020年秋、お米の穫り入れ作業
◀2021年6月、田植え前の水入れ作業

◀人力足踏み水車



A

▶足踏み脱穀機



B

▶唐箕(とうみ)



C

小学校の学習田にて 岡山市 矢部 顕 (文・4頁)

昭和36(1961)年9月28日 個人家庭での教導における質疑応答から

大倭の宗教談義——本当の宗教とは(上)

法主 矢追日聖(満49歳)

当日の法主さんの日記

(※瑞光庵の頃)

九月二十八日(木曜)

【天気 晴】

早朝から鈴月は苑(＝大倭安宿苑)の方へ沢山な洗濯物をもって参る。昨日頼まれた節子の回答を書いてやる(※前日の日記に「節子は、仏教伝来がわが国の思想文化にどのような影響を及ぼしたのか、の回答を依頼にきた」とある)。十一時頃、鈴月は上ってきた。急いで食事をしていると、森下夫妻が台風の見舞に見えた。十二時半過ぎ二人も同乗して国分の方から山ノ内町へ教導に参る。二人と我孫子(あひこ)駅前にて別れ、工藤さん宅へ参る。二時十分頃であった。

三時頃、近所の人達が集って来た。今井さんはテープレコーダーの用意を始め一同に聞かせる。東光大祭の法話からである。これが済んでから信人からの質問に答える。この質疑応答を録音された、約一時間(※今号の記事はこの録音から)。これから自然散会となる。

岡田さんが新人を連れて見えた。この人は精神苦で入るなり倒れていた。暫く寝ていたが座に出る。九月二十三日の月次祭の録音を聞かせ個人の相談に応ず。家麻呂はタイクツそうな顔付きで坐っていた。十時四十分頃辞去する。夜の奈良街道を帰途に向う。大和の夜風は気持がよい。月は皓々としている。今国府で今井さんと別れる。

十二時頃、帰宮する。拝殿(※旧拝殿)

に燈りがある。志な、良、健が何か話していたが、部屋へ入ると上ってくる。健は一人あとに残る。仕事のことでは家麻呂打合せをしていた。又、日元の気性について二人であれこれと観方を話し合っていた。三時になる。(法主日記)

ナモタカマノハラとは

宇宙創成の原理というものはね、電気の二極のように陰性と陽性なんです。世の中の一切の物質が、陰性と陽性の気の集まりによって出来ておられるらしいんです。人間の場合でも女と男がおつて、陰性と陽性なんです。

日本の古代の言葉として、「ター」と「カー」で言い表しています。だから父親のことはターさん、母親のことはカーさんと言ったんですね。

「ター」と「カー」というものが、万物一切の生みの親であるから、大倭の宗教の場合、「ナモターカーマノハラ」と唱えよと神さんがおっしゃるんですよ。「ナモ」は、仏教の「ナム」から来ているのかと思って伺ったんだけど、日本でも仏教の来る以前から神さんに「ナモ」と言ったりと年代の分からない大昔、一つのものに帰依するとか信仰するとか、手を合わせる姿を「ナモ」と言ったらしいです。こういう仕組みとか、仏教と共通の言葉だと思っただけです。

だから「タカマノハラ」に帰依するということ、一つの言葉なんです。祈りの言葉です。

大自然が最高の神さま

神と書きますが、「カミ」というのは上のことを言うんです。戦争中に現人神だった天皇陛下もお上だし、政府の仕事もお上の仕事と言う。一國

一城のお殿様もやつぱりお上なんです。

人間は、天と地の、地球に生まれてきた動物です。やはり地球で出来た物を食べ、空気を吸い水を飲み、自然の恩恵によって養われている。空気ひとつ無かったら生きていかれへんのやから、これ以上の「上さま」、あらへん。人類から見た大自然が最高の神さまです。

一番古い神さまとして、日本の祖先が崇拜していたのは大自然なんです。現実において地球があり水があり、人間から始まって動物や草木一切が自然に出来てきたんだけど、一番最初に誰かがこしらえたという考え方はね、これは神さまが創り上げたとしなければ言い方がないんですよ。

『古事記』『日本書紀』なんかの日本の古い記録ではアメノミナカヌシノオオカミという神さんの名前でもって言い表しています。自然神なんだから、形のある人格神とは違うんです。

さらに、その神さんの内容を二つに割ってしまつて片方にはタカミムスビノカミ、もう片方にカミムスビノカミという名前を付けて、それで三つを合わせて造化の三神とした。これは、一番古い神さんとして、日本の祖先が崇拜していた大自然を言うんですよ。普通、お宮さんで言う小さいひとつの存在である神とは違うんです。

造化の三神というのはね、科学的に言えばいわゆるエネルギー、神秘的に言えば大宇宙の根本神霊です。我々の考える力も、心臓が死ぬまで動いているのも、大宇宙のひとつの分神霊が身体に入っており、根本神霊が一人一人に通じておるからなんです。

『古事記』『日本書紀』を編纂した、あるいはそれ以前においても神憑りとか靈感者がアメノミナカヌシノオオカミという名前を聞いたんだと思いますが、大倭の場合、私の霊覚ではタカマノハ

ラオオカミだと教えられたんです。言葉が変わりますけれども、同じことなんです。

自然神と人格神

タカマノハラは、よく高天原という文字を使っていますけれども、昔の日本には漢字はなかったわけですよ。言葉はあつて音はあるんです。

宇宙創成の原理が陽と陰の動きなんです。陽性を「ター」と言い、陰性を「カー」と言う。タカマノハラは「ター」と「カー」はそういう意味なんです。

自分達の本当の親さま、神さまというのは、今も言ったように我々を生かしているところの天地自然なんです。

そこでね、例えば橿原神宮の神武天皇とかも神さまとして祭られております。我々の上の方から「上さま」とは言いますが、人格神なんです。初めて聞かれる方は分別つきにくいと思いが、人間界に生を享けた人間霊なんです。

【質問・先生がお伺いしたと言われる神さんは人格神ですか。タカマノハラオオカミではないんですね】

それはね、どちらもあるんです。例えば大本宮には、奈良朝以前とか過去にあそこで亡くなった人格霊がたくさん居るんです。そういう人達が生まれて生きていた間に修行してきたものがあります。そして霊界でまた研究しているんですよ。だからいろんな蓄積してきたものがあります。それを人格神が、私のところへ出て来て教えてくれる場合もあります。

さつき東光祭の録音を聞いてもらいましたが、大倭が宗教で立つ、その大本の場所がここであるという教えの時は、天の自然霊でした。

東方の瑞光

ちようど夕方、満月が出る時分、私はうつむいて仕事をしておったんです。それが上から引っ張り上げられる。仕事だから人間根性で抵抗しうつむいていると、また引っ張り上げられる。しようがないから頭を上げると、(東の)春日山の方から薄紫の、虹のような大きな放射状の美しい光がサーチライトのように(西の)生駒山の方に広がっていったんです。何と神秘的な！私は呆然として見ておったんです。満月がね、春日山の山際に出とった。

その時、虚空から、「黎明は訪れたり 東方の光 大法は立てり 大倭ターカマノハラ」と聞こえてきたんですよ。人格霊から言われる場合、私は分かるんですけど、その感じじゃないんです。これは自分の本霊の叫びがね、天に回って自分の耳に聞こえてきたのか、それは分からない。とにかく外部からきた人格霊じゃないんです、自然霊。

それで、ここが宗教の活動をする根本の場所になるんだなあと初めて自覚を得たんです。

その自分自身の悟りは、神さまの道で立つということだから、日本人である以上、日本人を主体とした説き方をしようというも思うのだけれど、人格神が出て来て教える場合は、仏教の言葉とか摂理でもって説明してくるんですね。今日までそういうものに慣れてきてますから、分かりやすいんですね。

逆に霊界から教えを聞きに来る場合もあります。東光祭の時には、霊界でも祭典をやっていて、奈良朝から始まって藤原一門やら何千という霊界人が皆私の話を聴いています。それで私は、たと

え誰もおらなくても真面目に話をするので。霊界からこういう話をしてくれと要請される場合もあるしね。

それはね、一旦、霊界に入ってしまったら、霊界人同士が寄って法を聴くとか、そんな機会がないんですよ。現界の人間が、霊界人に向かって説教はできるんです。だから大倭の祭典の時は、縁のある者は霊界から来るんです。

【質問…じゃあ、我々の先祖でも来てますか】
来てますよ。

宗教は現界に必要

【質問…最近、身近な者と死に別れました。すると今まで仏さんを粗末にしていたからだとか何とか親戚に言われるんです。それで私はね、宗教というものが死んだ者の霊を慰めるだけのものか、自分の精神修養のためのものか、本当はどうなのかと、今日お話を伺いにまいりました】
そうですね。

霊界はどうだと言ったって、霊界のことは、分かる者にしか分からない。世間で霊界のことを言っている人はたくさんありますが、霊界観というのには人によって皆違うんです。私の霊界観と違って、その人その人の霊的資格の問題であって、誰もまんざら嘘を言っていないんですよ。

簡単に考えたら、例えば人間の心臓を動かしているのは何の力か。自動車ならガソリンに点火して爆発させて動かすという原理です。人間の心臓の場合は、受胎した時にすでにその力が入っていったんです。これは宇宙の力ですよ。それが五十年、八十年と生きている肉体を動かしている。そのエネルギー、電気みたいなものが、私が言うのであれば霊魂なんですよ。

だから肉体が死んでも、肉体を動かしておった原動力である宇宙のひとつの力、霊魂というものは残るといのが理屈で分かるんです。

それはねえ、亡霊というのもあるんです。肉体の方がパツと離れたとしても、その霊魂の力は生きている人間と同じ働きを持っているんやから、ものも言うし考えるし、人を憎む場合も喜ばず場合もあるんです。霊魂そのものが、生きている人間と同じ働きを持っているんやから。

だから、生きておる時にひとつの道によって修養して、人間を向上させると霊魂も向上するんです。現界と霊界は、そういうように密接不可分の関係にありますけれども、死んだ人に対して慰めるといことが宗教じゃないんですよ。

宗教はあくまでも生きておる時に、現界に必要なんです。死んでからというのは駄目なんです。
【質問…じゃあ、自分の精神修養のための宗教なんですか】

自分のためではあるけれど、即、周囲のためになつておる。例えば、一人の罪悪者がおった場合に、ぐるりを酷い目に遭わすでしょ。反対に自分が個人が人間的に向上していけば、その身近な者が皆向上していく。これは仏教でも、仮に一人が出家したならば父母六親が救われると言います。

だから宗教の場合、自分だけの修養ということにならないで、その徳で周囲に良い影響を及ぼすことになるんですね。一番縁の近い人からポツポツ救われる。あるいは先祖に至るまで霊界で向上していきますよ。霊界では他の力でないと、自分の力ではできないんですね。

宗教は生きておる時にしておく。まず生きている人間に対する教えだから、死んだ人はかまわないう、ほつといてもいいんですよ。しようがない。(つづく)

表紙写真によせて

お薦めの絵本『稲と日本人』

岡山市 矢部 顕

◆2020年秋、学習田でお米の穫り入れ作業

10月末、近所の浮田小学校の学習田(写真A)で5年生の子どもたちが稲刈りをし竿掛けをして乾燥させた稲を、11月中旬「脱穀」作業をして最終のお米になるまでを体験させました。脱穀は、人力足踏み脱穀機を子どもたちが操作して行います。この足踏み脱穀機は戦前まで使われていたものを私が修理して使えるようにしました(写真B)。

「選別」は、籾と藁くずとを選別するのですが、手回しの羽根の風力で選別する唐箕というやはり古い道具です(写真C)。

◆2021年6月、田植え前の代かきの水入れ作業

江戸時代中期から昭和20年代までは、人力足踏み水車で水を田んぼに入れていました。川の水の流れで回転する水車とは違って、逆に人間の力で(体重をかけて)回転させて水を汲み揚げる水車(みずぐるま・踏み車ともいう)です。近所の農家の倉庫の奥に眠っていたものを頂戴して、修理して使用出来るようにしました。(写真D)

*

学習田でのお米づくり体験と共に、本からの研究学習のために私が選んだのが、『稲と日本人』という絵本でした。数年前にこの絵本のことを知ってびっくりし、とても感銘をうけたので、ぜひとも子どもたちに読ませたいと思い、5年生の学級文庫に複数冊を寄贈しました。その頃、書いた推薦の文章は次のようなものでした。

『稲と日本人』甲斐信枝著 (福音館書店)



—日本に稲作が伝わったのは、はるか二千年百年前です。以来、日本人は、森を切り開き、山をけずり、疎水を作って水を引きこみ、海岸を埋め立て……力の限りをつくして水田をふやしました。そして、自然災害と闘いながら稲作を続けてきました。稲と私たち日本人は、動物と植物というかけはなれた間柄ではなく、生死とともに生きぬいた、かけがえない仲間同士なのです—

(解説より)

先日、甲斐信枝さんという絵本作家の方の講演会に行ってきました。昨年出版された『稲と日本人』(福音館書店・2015年)という絵本に接する機会があり、その絵本の質の高さと内容に圧倒されました。とても偶然だったのですがタイムリングよく著者の講演が岡山の大学で行われることを知り聴きに行きました。

『稲と日本人』というテーマはたいへんに大きなテーマです。そのテーマにふさわしく非常に力のこもった絵と文章に驚きましたが、15年の歳月をかけて研究し制作し完成したとのこと聞いてさらに衝撃を受けました。いまだき拙速的な書籍があまりにも多い出版界で、熟成にかけた時間の長さのため息がでます。

甲斐信枝さんは、1970年以降30冊以上の絵本を発刊(その多くは福音館書店発行)されていますが、そのほとんどは雑草が小さな昆虫の絵本です。名もない草や小さな動物も人間と同じ生き物なのだ、という視点での哲学をゆるぎないものとして持っていらっしやることに感銘を受けます。

稲を見て、「まあ、覇気のない生き物なこと。人間がかかわらないと生きてゆけない」と感じたとおっしゃったのですが、力強く生きている雑草などの自然界を見つめてきた眼力はすごいものがあります。「1億年以上前には雑草として生きていた稲が、人間が常食にしようとしてから飼いなされるようになった。1万年前には、飼いなされることに抵抗しなくなった」と。この直観力には信じがたいものがあります。

あとで知ったのですが、『雑草のくらしーあぎ地の五年間—』(福音館書店・1985年)を出版するにあたっては、空き地の雑草を5年間にわたってつぶさに観察し見守ってから制作刊行したとのことでした。タイトルの『雑草のくらし』の「くらし」という言い方に、甲斐さんの生き物に対する愛情が表れている気がします。

「なぜ、このような絵本の作家になったのですか?」という聴衆の質問に答えて、「かんとんです。小さいころから雑草が友だちだったから。雑草からたくさんのことを教えてもらったから」。講演から「稲作の歴史もまた人間の壮大な物語である」ことをあらためて認識させられました。野生種、渡来、飢饉、品種改良、多様性、このようなことを柱にして制作されたとのことですが、日本人が稲とどのように共生し長い歴史を歩んできたかがわかる日本人の精神史でもあります。

*

1930年生まれの、まあ相当なお年寄りのおばあちゃんである甲斐信枝さんが、15年の歳月をかけて制作した情熱に圧倒されました。

『稲と日本人』は、日本のすべての学校の図書室におくべき、あるいは副読本にでもすべき、絵本というか研究書といってもよい本だと思います。(2016・3・21)

じんずうりきによせ
 「神通力如是」の真意をさぐる 第十五回 大倭教の源流にさかのぼって

今回は、法主と親しい間柄にあった鹿島神流の
 武術家・國井道之氏が座に加わり、本人に武甕槌
 神が憑って神語を行うという新たな展開になり
 ます。次回も今回に続いて國井氏が登場しますの
 で併せて読んでください。

今回は紙面の都合もあり現代語訳は省略させて
 いただきます。

原文

十一月十三日 午前十時 於鳥見庄山

「倭姫、拙ナキワザニテハ候ヘドモ、ミ
 神楽ソウシマイラセン」 題目、、、
 「アーアーアー 大八洲嶋、秋津嶋根ノ
 日本ハ、幾千代マデモ榮エユク」
 題目、、、

「神楽タダイマオサメ候。拙ナキワザニ
 ミ前ケガシ、ナニトゾオ許シアレ。倭姫
 オイトマチヨウダイ仕ル」

①附言、②國井道之座にありて、武甕槌神憑
 る。③大國主命日聖をして説かしむ。鹿島
 の武は妙法なるぞ、文武即妙法。

國井道之談、昨夜半武甕槌神に起され
 静座すれば、南無妙法蓮華經の哲理を説
 き玉ふ、之れ宇宙の真理なりと。

⑥世ハ乱レ麻ノ如クニナリヌトモ、我が
 スメラギノ道ハ変ラジ

人倫ノケガレタル世モ、スメラギノ

道モテカヘセ 神代ナガラニ

⑦『国策遂行ニハ先ヅ側近ノ奸ヲハラヘ』
 太字に出る。

以上武甕槌神、國井道之に憑りて宣ふ。

註釈

①附言

この、「附言」では同座している國井氏に憑
 る武甕槌神（人格霊）に対して大國主命（人
 格霊）の心意を法主がその代弁者となつて鹿島
 の武について語られた。このやりとりは、この
 後の同日午後七時からの神懸かりの語らいへと
 続いて行く。

※今回は『おおよまと』の紙面上、その前半
 （同日午前十時）からの部分のみ掲載すること
 になるが、読者の皆様には次回の十一月号掲載
 文と併せて読んでいただきたい。

②國井道之（國井善弥源道之）

福島県いわき市出身で鹿島神流師範家十八代
 の武術家。幾多の他流試合でほとんど各流各派
 を破つて「生涯不敗の武道家」と称された。

その業績は、いわき市湯本町関船字宿内勝蔵
 院山内にある國井家墓所に建てられた墓碑に記

されている。

（國井善弥先生墓碑文）

國井善弥先生、道之と号す。明治廿七年一月
 廿日福島県湯本町に生る。國井家相伝鹿島神流
 武術を継承し、師範家十八代となる。第一次大
 戦に従軍。後、国学者今泉定助先生に師事。同
 時に国学院大学を卒業し、深く国体の尊嚴を悟
 る。日本皇政会・血盟団興亜同盟・日本青年連
 盟に参与し、陸軍戸山学校・錦秋高等女学校・
 立命館大学・鹿島神宮大道場の講師を歴任す。
 日本古武道振興会を起し、古武道振興に尽瘁す。
 抑々鹿島神流は日本神武に淵源し、鹿島神宮
 に伝はる鹿島の太刀を基とし、遠祖國井景継後
 見して松本備前守紀政元開流す。五箇の法定を
 持ち非攻非守自ら行いて包容同化の大義を示す
 則業也。先生常に鹿島の神に祈り精進して措か
 ず。夢寐に太刀をとり神人合一して神示を蒙る
 こと一再ならず遂に神技に至る。東京滝野川に
 道場を開く。

人と為り純心、交りて忠淳、金錢に恬淡に、
 茶菓に陶然として歌唱を楽しむ。一度武術に対
 しては秋霜激烈。導いて孜孜技を惜まず。門弟
 甥集し他流より教へを乞ふ者踵を接せり。

年七十有二歳尚日暮に練武し、逝く日に至り
 心臓に急疾して漸く息む。秋に昭和四十一年八
 月十七日也。送葬の日、頻りに雷鳴あり、劍聖
 の死を悼む。湯本関船なる先塋の下に葬す。

彫塑家北村西望先生題額

門人農學博士関文威撰、同武居价以謹書
〔※碑文にはないが、読みやすくするために句読点、改行を入れた〕

第二次世界大戦の敗戦後、日本は武道教育を米国進駐軍により禁止されていたので、剣道復活をGHQ(進駐軍最高司令部)に認めさせようとして國井氏が担ぎ出されたことがある。米軍海兵隊の銃剣術教官と公開試合をすることになったが、木刀を持った國井氏が一瞬で勝敗を制し、日本教育での剣道復活に密かに貢献したという秘話もある。(以上、杏林書院発行の関文威著『日本武道の淵源―鹿島神流』及び『鹿島神傳(武術)による(武藝)』による)

③武甕槌神
武甕雷神とも。「古事記」では建御雷神・建御雷之男(たけみかずちのお)神。日本神話にみえる神名。

名義はタケノミカトツチで勇猛な敵(かみ)の靈(ち)の意。「日本書紀」では天の石窟(あまのいわや)に住む稜威雄走(いっのおはしり)神の曾孫とし、「古事記」ではイザナギが刀劍神伊都之尾羽張(いっのおははり)でカグツチを斬った際、その血によって成った神とする。

國譲りにあたり天孫降臨に先だつて派遣され、武威をもって地上世界を服従させた。

「日本書紀」ではフツヌシの從神とされ、「古事記」では主神とされるといふ違いがある。神武天皇東征の際にはタカクラジを通じて刀劍を与え、助けている。

鹿島神宮の祭神とされ、藤原氏の氏神として春日大社にも祭られる。(山川出版社『日本史人物辞典』による)

④大國主命おおくにぬしのみこと

日本神話で、出雲国の主神。素戔鳴尊(すさのおのみこと)の子とも六世の孫ともいふ。少彦名神(すくなびこなのかみ)と協力して天下を経営し、禁厭(まじない)・医薬などの道を教え、国土を天孫瓊瓊杵尊(にぎのみこと)に譲つて杵築(きずき)の地に隱退。今、出雲大社に祀る。大黒天と習合して民間信仰に浸透。大己貴神(おこなむちのかみ)・国魂神・葦原醜男・八千矛神などの別名が伝えられるが、これらの名の地方神を古事記が「大國主神」として統合したもの。(岩波書店『広辞苑』による) 奇玉饒速日命(くしたまにぎはやひのみこと)亦の名、大國主命、天照國照彦火明命(あまてるくにてるひこはやあけのみこと)、大物主命(おおものぬしのみこと)及び天火明命(あめのほあけのみこと)とも言い、建速須佐緒命(たけはやすさのおのみこと)を父とし奇稲田日女命(くしいなだひめのみこと)を母として、この大倭祖神の靈地にて降誕された。後世、この命(みこと)の徳を讀(よ)んで多くの別名ができたのである。(『大倭神宮伝承の紀』による)

⑤鹿島ノ武ハ妙法ナルゾ

國井道之の弟子であり鹿島神流師範家十九代の関文威が鹿島神流について記した書物の中に、この言葉についてのいくつかのヒントがあるように思われる。

まず、鹿島神流の本義として、「初にして体を整へ、中にして心気人倫を養ひ、極めては宇宙創元の理を悟るに至る」と述べている。また、自然現象を「発顕・還元・推進のリズム」として顕れ、無始無終である」と捉え、「五ヶ之法定(神流極意法定)」という武道の基本原理を説いている。「五ヶ之法定」の基本要素として、

「動靜一体」、「起発一体」、「攻防一体」、虚実一体」、「陰陽一体」の五つをあげている。

さらに「修靈法」という部分で興味深い指摘をしている。「鹿島神流の武道は、日本神武の精神『包容同化』の大義を示す則業である。したがって武術の修業を通して中正不偏の術を身につけた後は、心気人倫を養い、宇宙創元の理を悟る極意に到達する鎮魂の修業を行うことが望ましい」。

これらの言葉で関文威氏が語っていることは、まさに「鹿島ノ武ハ妙法ナルゾ」ということに通じているように思われる。

(杏林書院発行の関文威著『日本武道の淵源―鹿島神流』による)

⑥スメラギ

天皇(古くはスメラキ・スメロキとも)
(一) 地方豪族の首長。(二) 日本国の首長。天皇。すべらぎ。(岩波書店『広辞苑』による)

⑦国策遂行ニハ先ツ側近ノ奸ヲハラヘ

昭和16年7月2日に御前会議で、情勢ノ推移ニ伴フ帝国国策要綱が決定され、独ソ戦でソ連の敗戦が明白になった場合には「武力ヲ行使シテ北方問題ヲ解決」すること、「南方進出ノ態勢ヲ強化」し、そのためには対米英戦も辞さないという強行策が決められた。また、昭和16年12月1日には御前会議で最終的に「対米英蘭戦決定」が国策となる。ここでいう「側近ノ奸」とは、この国策に反対する側近の人々のことを指すと思われる。

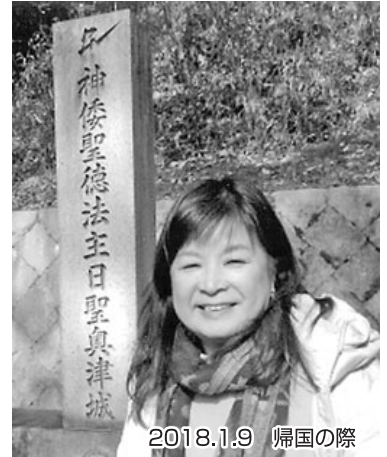
このタケミカツチの言に対し、今回の「神通力如是」において、同日夜、國井に神憑りした武甕槌命と妙月に憑依した大國主命との語り、サニワ役の法主の記録が出てくるので併せて読みたい。

寸 莎

第145回

齊藤 光代さん

(キミコ・リスターさん)



光に導かれて

本紙7月号の「波紋」で、カナダ在住の齊藤光代さんのメールを紹介したのを覚えておられる方がいるだろうか。彼女はその後メールの続きを送ってくれて、自分のことを記事にして法主様への感謝の気持ちを伝えてほしいと言ってきた。「寸莎」としてはかなり変則的であるが、直接取材することなしに彼女からのメールを中心にその思いをまとめてみることにした。

齊藤光代という名は、当時本名を出しにくい事情があり、法主様が名付けた仮名で、本名は後藤紀美子であった(現在はキミコ・リスター)。長崎県の南に位置する野母半島の先端にある樺島で育った。

養子に出されて長年顔を合わせたことがない実兄と何かの機会に出会った時に、兄が妹に対して尋常でな

い愛着を抱いた。暴力も含めて迫られた彼女は、命からがら逃げまわっていたといういきさつがあった。

かつて紫陽花邑に短期間滞在し、大倭印刷の仕事も手伝っていた上野允士さんが彼女と大倭を繋いだ。

《私が17歳の頃、上野さんは樺島の前田おばあちゃんの家の2階で半年くらい滞在して本を書いていました。おばあちゃんにすすめられて、孫の元さんが長崎市内にオープンしたカラヤンという喫茶店に二人でバスで出かけたことがあります。そのバスの中で上野さんが、「もしどうしようもないことが起こったら、自分で電話しなさい。いつでもドアを叩けば開けてくれるところを知っているから」と自分の電話番号を書いて私にくれました。その時、何と不思議なことを言う人かと思いつながら、その番号を持ち続けていたのです。それから4年後に、「もう自分で

どうすることもできません、怖くて」と上野さんに電話をかけることになると思いませんでした。》
そして、上野さんは大倭に連絡して、法主様はすぐに迎えに行くように筆者に頼んだ。

《野母崎でクラスメートだった大阪の友人の家に隠れていたところに迎えにきて、大倭に連れていってくれました。私は血のついたTシャツと履いていたジーンズだけで、お金もない、着替えもない。そんな私に真新しい下着や衣類がぎっしり詰まった段ボールを一箱くださり、3万円の現金までいただきました。私の大倭での生活は、このようにして始まったのです。》

ところが、どこでどう嗅ぎ付けたのか、彼女を追いかける兄は、何と法主様のところに現われたのである。法主夫妻は彼のことを柔かく受けとめ、彼も心を開いて話し込んでいくようになったという。しかし、油断はできる状態ではなかった。

《ここも危なくなってきたので、場所を変えた方がいいと法主様から言われるまでの6カ月間、私は施設で働かせていただきました。》

大倭で紹介されSCI国際労働奉仕団の拠点になっていた山梨県の海拔1500mの山間にある金峰牧場に連れていっていただき、その後

兄から逃れて、東京や韓国に住んだり、山あり谷ありの人生を歩み、今のカナダにたどり着きました。》
光代さんは法主様への思いをこう語る。

《私は本当に次から次へと、とても素晴らしい人から人へと繋がって、その人たちの光をいただいたいて躰(からだ)のように前を見るのができませんでした。法主様からつけていただいた名前「光代」、その法主様からの光に導かれて生きたという私の人生でした。感謝です。》

兄についてもこう書いている。
《兄は法主様から買っていた片道切符でメキシコ流しとされるが如くメキシコにたどり着き、新たな人生が始まったのです。》

彼女の兄はメキシコで現地の女性と結婚し子供も設けているが、重い肺ガンに罹って息子を通して彼女に謝りたいと伝えてきたとのこと。

《でも、今さら謝られても元には戻りません。あくあ、私は長崎で普通の平凡な暮らしをしたかった、と今でも思いを馳せることがあります。》
兄の肺ガンの4回目手術の後の帰幽の報に接して、光代さんはため息をつくように語る。

《私の中の嵐がやっとおさまったんだなあ、という気がします。》

(筆者 川岸田哲)

あじさい日誌

8月8日 朝8時から大倭墓地清掃、9時から故中西正和元大倭会会長が言われた掃除の日でした。大倭安宿苑の職員、邑の内外の参加者多数に感謝。

8月9日 長崎原爆投下の午前11時02分、拝殿の大太鼓より鎮魂の音霊が発せられました。

8月15日 大倭神宮において大倭教立教開宣記念祭。昭和20年のこの日は日本の敗戦日。

昭和16年の「神通力如是」において、奇稲田姫が『いまはノモトは闇、この闇を押し開け』と言われていました。そして「神通力如是」を書き終えられたのが、同年12月8日、太平洋戦争勃発の日でした。

日本の闇が開かれたのが昭和20年8月15日だったのです。

8月22日 大倭大本宮で東光大祭及び祖霊祭が滞りなく行われました。

8月23日 大倭大本宮月次祭。この日の法話は昭和39年8月23日の録音で、平成23年8月号『とおやまと』に「昭和維新の意味とは」として掲載分。

9月5日 午前9時から毎月第1日曜日の大倭墓地清掃。

9月6日 大倭神宮月次祭。この日は「神通力如是」では「日聖の裏」のお役目をされていた妙月かあさんのご命日。

夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では 8月25日 各施設の管理監督者、管理者がセクハラ・パワハラ防止のリモート形式の研修。(菅原園)

8月20日 2回目のコロナワクチン接種が行われました。(須加宮寮)

8月11日 大倭墓地へ墓参。8月19日 水害想定で、エレベーターや階段で垂直避難訓練。(長曾根寮)

8月16日 (デイ) 感染予防のため日を分け縮小して夏祭り。8月22日 (特養) 夏祭り。絵と照明で花火の光を再現!?

(茂毛路園) 8月19・25・31日 屋台や食券を作り、夏祭り風の昼食を演出。(八重垣園)

8月19日 5名の方の誕生会で、紅白饅頭のお祝い。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 10月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催観会 10月10日(日) 中止とします。

*月次祭(大倭神宮) 10月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮) 10月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

こたまとこたまと

北海道小樽市 守谷明宏

5月号「天地自然の心から遠ざかっている人類」の校正をしながら読んで考えたことは、転生についてです。

霊という存在は確かにあり、それは私達には見えないがすぐそばにあるものであって、例えばコップの中にある水のように、気化してしまっても空気の中に溶け込んでいるようなものだということは、以前から思っていました。

この濃淡はあるのだろう。これを気化させない水として例えて見ます。大きなプールにコップに入った赤い水を流し込んで、そののちにすぐにまたコップにすくい上げると、流し込む前の赤さは多少薄れるものの赤い水がコップにある。最初に流し込んだ濃さとすくい上げるタイミングで、コップの水は濃淡に違いがある。

それをまた流し込んですくい上げると、さらに薄くなる。流し込んだ時に透明な水ではなくて、近くに緑色の水が流れていたら、赤色と緑色が混じりあつた水をすくいあげる事になる。これを何度も繰り返していくことが転生であり、最初の濃い赤い色のままでは、決してすくい上げられない。すくい上げたコップには違った色が混ざつた

り、薄くなつていたり、すくい上げるのがずっと遅かったら、あるいはほとんど色のついていない水がコップにあるかもしれない。そうやって霊界人とのつながりが続いていくのであって、ある霊界人の100%転生では決してないと思うのです。

プールという霊の世界に流し込んでしまった色のついた水(悪しき因縁)を、早くすくい上げてしまった(転生した)コップの水(現界人)は、浄化し薄くして戻してあげる(プールに流し込む)ことが現界人の務めなんですよ。浄化し薄める行為が、「この世ですべき使命」なんだろうなと、そんなことを考えています。

2021・5・16

滋賀県大津市 樋口寛美

新聞をお送りいただきありがとうございます。今回の7月号「神ながらの味を心で掴む」には驚かされました。宇宙、相対性理論まで「かんながら」の道にあるなんて!

《相対は一体、

一体は相対の世界 日本の古典の場合でも、神さんの名称で、宇宙のエネルギーを説明しているんですね。高皇産靈、神皇産靈という相対があつて、それが天御中主という一体になつている。だから天御中主の話をすれば、その中に高皇産靈、神皇産靈というものが、

また別にあるんです。結局相対が一体になり、一体が相対になる。非常に尊いことだと思ふんですが、それは現代でも変わらない。

私の話す宇宙の真理というものは、そういうところから出発しているんです。過去の人達がやっぱりそういうように感じとっている。今さら私が発見して言っているんじゃないんです。先人の体験したことを私がただ繰り返しておるだけです。私が研究して新しいことを発表しているんじゃない。昔の人の真似をしているんです。》

アインシュタインは、例のE=mc²の式を発見、原子エネルギーを取り出した。「一般座標変換によつて物理法則は不変である」つて、相対は絶対と一体と言つてるんじゃない? 素人の私は、それ「結局相対が一体になり、一体が相対になる。非常に尊いこと」じゃないの! 法主さんは未来を全部先達が知つて、自分に伝言したと言つてる。びっくり仰天しました。

科学者であるアインシュタインは、「神はさいころ遊びをしない」という有名な言葉を残しています。科学者の彼は「量子論」のあいまいさを批判したと言われますが、「神」を否定していません。「さいころ遊びをしない」と言ってますから。

2021・8・1